初年次教育での他者理解に関する演習

Practice about others-understanding by First year experience at Universities

髙　橋　昌　子
TAKAHASHI Masako

はじめに

A大学では初年次教育の一環として、全学科の新入生に対して「基礎演習」という科目を必修として設けている。本科目は、大学生として4年間充実した生活を送るための基本を学ぶことと、大学で講義を受けるための基礎力を様々な角度から身につけることを目的としている。初年次教育でのひとつの試みとして、筆者は基礎演習の授業のなかに他者理解の演習（以下、本演習）を取り入れてきた。本演習を通して、初年次教育における大学生の他者理解について考える。

1．研究目的

初年次教育における基礎演習では、スムーズな履修確認、学生生活の基礎知識、就職への準備、図書館の利用法、学科セミナー等と、大学で講義を受けることの基礎を様々な角度から身につけることを目的に、「読む力」、「書く力」、「発表する力」の習得を目標に各学科の担当教員が取り組んでいる。大学としての共通教育の一環であるが、一方では各学科の特徴を活かした授業展開も求められる。筆者は社会福祉を専門とする学科の学生を担当、指導しており、学生自らが選んだ社会福祉専門教育の初年次に、本演習を取り入れることにより、2年次生以降の専門性を深める教育へ適切につなげていくことを目的に取り組んできた。本稿は、本演習を通し、より効果的な初年次教育への取り組みに一考察を加えることが目的である。

2．研究方法

A大学の建学の精神や学科の目標を理解し、学科の教員や学生との親睦も深めながら新しい大学生活に徐々に慣れ、長期の夏季休暇前でもある七夕を本演習の時期に選んでいる。2006年から七夕飾りの演習を授業に取り入れ、他者理解の演習につなげている。本演習において短冊に記す願いごとは、新入生としての学生の願いごとではなく、学生が高齢者になった場合と、学生が幼児になった場合を想定したものとしている。短冊の願いごとのみならず、それぞれの年度で特徴のある七夕飾りができあがり、1年間、筆者の研究室を彩ることとなる。本稿では、2006年から2011年度の本演習での短冊に書かれた願いごとを各年度ごとに記し、新入生が高齢者と幼児という他者をどのように捉え、理解しようとしているかを考察した。

3．結　　果

対象学生（筆者担当学生）の人数は表1のとおりである。

表2では、各年度の願いごとの分類を示した。

表1　対象学生数

年度(年)	学生数(うち留学生)（人）
2006	13（2）
2007	16（2）
2008	12（0）
2009	12（0）
2010	21（2）
2011	26（2）

神戸親和女子大学　発達教育学部　福祉臨床学科

表2　年度別願いごと（複数記述を含む）

年度(年)	高齢者になったつもりで	人数(人)	幼児になったつもりで	人数(人)
2006	楽しい生活	4	○○屋さんになる	2
	長生き	2	お金持ちになりたい	2
	幸せな生活	2	○○が食べたい	2
	楽に死にたい	1	おもちゃ（人形）がほしい	2
	孫と元気に暮らす	1	ディズニーランドに住みたい	1
	充実した日々	1	友達と仲良く	1
	家族の健康	1	妹がほしい	1
	世界平和	1	夢を叶える	1
	お金がほしい	1		
2007	健康	6	○○（キャラクター）と一緒	2
	夫婦円満	5	○○が食べたい	2
	幸せで楽しい暮らし	4	いろんな所に遊びに行きたい	2
	家族と健康で仲良く	2	お金がほしい	1
	世界平和	2	ピアノが上手になりたい	1
	一日一日を後悔のないように	1	みんなとたくさん遊ぶ	1
			友達をたくさん作る	1
			時間がほしい	1
			○○屋さん	1
			魔法使いになりたい	1
			泳げるようになりたい	1
			お母さんに会いたい	1
			○○を買ってほしい	1
			家族仲良く	1
			空を飛びたい	1
			宇宙にいけますように	1
			自転車に乗れるように	1
			素敵な人になりたい	1
2008	健康で長生き	3	○○と結婚したい	2
	安楽死	2	逆上がりができるように	1
	世界平和	2	○○（有名人）に会いたい	1
	家内安全	1	○○（キャラクター）になりたい	1
	楽しく過ごす	1	お金がほしい	1
	元気で旅行がしたい	1	○○屋さん	1
	おなかいっぱい食べたい	1	ウサギがなついてくれるように	1
	25m泳ぎたい	1	お兄ちゃんが意地悪しないように	1
	車の免許取得	1	双子になりたい	1
			弟か妹がほしい	1
			○○君と一緒に虫を探したい	1
			鼻血がとまりますように	1
2009	健康で幸せに暮らす	6	○○屋さんになりたい	3
	ひ孫がみられますように	1	好きな人と結婚	1
	スウェーデンで暮したい	1	サッカー選手	1
	家族と幸せに暮したい	1	お姫様	1
	孫が元気に育つように	1	自転車がほしい	1
	3女の結婚式に出られるように	1	空を飛びたい	1
	最高齢でギネス登録	1	頭がよくなりたい	1
			ピーマンが食べられますように	1
			ぬいぐるみがほしい	1
			お母さんの美味しい料理食べたい	1

年度(年)	高齢者になったつもりで	人数(人)	幼児になったつもりで	人数(人)
2010	健康で過ごしたい	7	○○（キャラクター）になりたい	5
	長生きしたい	5	○○屋さんになりたい	2
	夫婦で仲良く健康でいたい	1	ウルトラマンに会いたい	1
	楽しく暮したい	1	プレゼントいっぱいほしい	1
	幸せに暮したい	1	透明人間になりたい	1
	縁側に座って隣にネコがいてほしい	1	新しいゲームがほしい	1
	若い頃に戻りたい	1	○○と結婚したい	1
	おかきが食べたい	1	逆上がりができるようになりたい	1
	家族みんなが笑顔で暮らす	1	猫になりたい	1
	平和に暮らす	1	お菓子をいっぱい食べたい	1
	小さな幸せを感じていたい	1	サッカー選手になりたい	1
	ゲートボールが上手になりたい	1	魔法使いになりたい	1
			パイロットになりたい	1
			みんなと仲良く遊びたい	1
2011	長生きしたい	3	お嫁さんになる	2
	健康	3	○○屋さんになりたい	2
	楽しく過ごしたい	1	○○（キャラクター）になりたい	2
	天国に行きたい	1	空を飛びたい	1
	最高齢でギネス登録	1	願いごとが叶うように	1
	生まれ変わっても今の旦那さんと	1	お友達がたくさんほしい	1
	めぐり合いたい		お姫様	1
	夫とラブラブで過ごせるように	1	AKBに入りたい	1
	青春時代に戻りたい	1	家族が仲良しでいられますように	1
	孫が元気に育つように	1	ママみたいになりたい	1
	第三の人生も幸せでありますように	1	ままごとでお母さん役になりたい	1
	孫の花嫁姿が見たい	1	愛されたい	1
	娘がお嫁にいきませんように	1	トマトになる	1
	今までの大切な思い出を忘れないよう	1	お金持ちになりたい	1
	地域の人達と一緒に仲良く	1	学習机に入りたい	1
	定年まで働きたい	1	押入れで寝たい	1
	メタボになりませんように	1	ドラえもんがほしい	1
	息子が受験に合格するように	1		
	髪の毛が戻ってくるように	1		
	給料があがりますように	1		

4．考　察

社会学小辞典では、他者理解とは、「シュッツがM.ウェーバーの『主観的に思念された意味の理解』という構想を引き継いで『社会的世界の意味構成』(1932) で用語化した概念。自我が他我の体験を、他我が自らの体験を自己解釈するのと同じ仕方で解釈すること。」[1] と示している。

社会福祉での援助関係では、何らかの課題をかかえる利用者と、それを援助するソーシャルワーカーを中心に、ソーシャルワーカーが信頼関係を築きつつ、課題を解決していく。相談援助の演習で取り組む他者理解は「他者の気持ちをどう理解するか」、「信頼を基盤とした援助関係とはどのようなものなのか」、「他者を理解するとはどういうことなのか」等を学ぶために、疑似体験等を通して理解を深めていくことがある。本学では、ブラインドウォークや高齢者疑似体験グッズ装着等を活用して1年生後半の演習科目として取り入れられているが、その際、ほんのわずかな障害や高齢の疑似体験で「障害者や高齢者の気持ちがわかった」などという傲慢な姿勢をもつことは慎まなければならないことを強調して指導につなげている。本稿では、こうした社会福祉の専門的な演習に入る前の段階として、短冊への願いごと記述という手法から、他者として高齢者と幼児を大学生としてどう捉えているのか、さらに、相談援助での他者理解について以下の項目で考察を加えた。

（1）「健康」がキーワードである高齢者の捉え方

どの年度も、長生き、健康、健康で長生き、という健康面での願いごとが多く示されていた。自分自身の健康とともに、家族あるいは夫婦の健康を考えており、高齢者にとって健康を願う気持ちが強いことを大学生も意識しているようである。また、充実した日々、楽しい暮らし、幸せに暮らす、第三の人生も幸せであるように等、日々の生活の充実と安定を願う高齢者像が表れている。反面、高齢者にとっては若者よりも強く意識するであろう「死」への願いごとも記されている。楽に死にたい、安楽死、天国に行きたい等、死が避けられない現実であることと、死を意識しながら受け入れているという大学生もいる。その他には、自分自身より外へ視野を広げた世界平和と、自分自身の内なる孫に関する願いごとが示されていることも特徴のひとつである。社会への関心ごとに多様性があることは、今後、他者理解を深めていくために重要な視点であろう。また、1人ずつ異なる願いごとが多く記されており、大学生としての高齢者の捉え方の広さがみえる。

（2）幼児の願いごとの特徴

大学生にとって高齢者とは異なり、幼児は自分自身がすでに経験した年代である。そのため、幼児の捉え方も、高齢者の捉え方と大きく異なるのではないだろうか。「～になりたい」や「～がほしい」等、具体的な項目が記されており、お店屋さんやキャラクターや有名人等、固有名詞が示されている。キャラクターや有名人はその時代を反映したものを意識して記しているようである。高齢者でほしいものを具体的に示したのはお金であったのに対して、おもちゃ、妹や弟、ぬいぐるみ、プレゼント等、幼児の願いの多様性も示されている。人生経験の少ない幼児が、夢のような事柄を願いごととして表現していることは、大学生が幼児という他者と接する際、相手に寄り添うことのひとつのきっかけになろう。

（3）初年次教育における他者理解について

高齢者と幼児を通して他者理解につなげる本演習に、今後、大学で深まる専門教育への適切な導入と移行を意識して毎年取り組んできた。初年次生を青年期と捉え、青年期より以前の幼年期と、青年期より以後の老年期をイメージすることは、他者理解を深めることによる自己覚知にもつながると考える。Amanat らは「青年期は人生で最も精巧なドラマの一つといってもよい。それは道徳的・性的行動が成熟し、若い個人が家族と暮らす時期から、独立した教養ある存在へと移行していく過程をさす。青年期という魔法のような時期に、無力で従順な子どもが、法を守り、人の面倒を見、法をつくる次の世代の大人へと育っていくのである。」[2] と指摘する。そして、「親と十代の問題の比較」として、親と十代の欲求の対比を表に示している。この表は、高齢者と大学生、幼児と大学生という他者理解の対比にも類似することがあり、下記に表示した（表3）。

表3　親と十代の問題の比較

親の欲求	子の欲求
理解したい	曖昧さを求めていたい
導きたい	失敗から学びたい
助言したい	複雑でありたい
まねしたい	複雑であり、かつ自立したい
できるだけ早く対立を解消したい	解決を先のばしにしたい
将来が知りたい	未知の世界で漂いたい
比較し、すべてを見通したい	不透明でありたい
関わり合いたい	プライバシーが欲しい
抱え込みたい	自由にさせて欲しい
支配したい	権力に対して反抗したい
同意したい	同意したくない
平和と統合を保ちたい	苛立たせ変化させたい
見通しをもちたい	衝動に従って行動したい
限界を設けたい	限界に挑戦したい
尊敬を得たい	力を得たい

出典：エブラヒム・アマナット/ジーン・ベック著 「十代の心理臨床実践ガイド 揺らぐ十代と向き合うために」より

表3からは、理解したい、関わり合いたい、平和と統合を保ちたい、限界を設けたい等、親の欲求が高齢者の願いにも通じる点が見出せる。また、曖昧さを求めていたい、未知の世界で漂いたい、限界に挑戦したい、力を得たい等、子の欲求が幼児の願いにも表れている。このような十代の初年次生への教育を、人とかかわりの深い専門教育につなげていくためには、様々な年代の人に対する理解、多様な課題や問題を抱える人への理解等、他者を理解することがいかに重要であるかを意識させる指導も必要である。

（4）相談援助における他者理解について

相談援助では、援助者が利用者の価値観を認め、理解し尊重する態度が求められる。そのために、援助者が利用者のことをよく理解すること、非審判的態度で利用者のありのままの姿を受け止めるという他者理解が重要である。他者理解のためには、援助者の自己理解や自己覚知が必要であり、社会福祉用語辞典では、自己覚知を「社会福祉援助において援助者が、自らの能力、性格、個性を知り、感情、態度を意識的にコントロールすること。援助は援助者の価値観や感情に左右されがちであるが、利用者の問題に自らの価値観や感情を持ち込むことは、問題の状況を誤って判断することに結び付く。そのために援助者は、自らを知り、コントロールする自己覚知が必要となる。」[3] と記している。相談援助の過程では自他の価値観を一致させるのではなく、互いの価値観の違いを認め、その違いを尊重し合うことが求められるのである。他者理解の最も本質的手段は「傾聴と共感的応答」とされている。傾聴と共感的応答とは、「利用者の話に耳を傾け、利用者の気持ちに寄り添い、抱える問題の内容を正確に受けとめ、その理解を利用者に伝えること。利用者を受容し、理解するための援助者の最も基本的な姿勢」[4] とされている。さらに、共感について Trevithick は、「良い援助関係をつくるには、他者と共感しあうことが必要である。共感とは、我々自身が他者の身になることを意味し、他者の感情、思考、行動や動機を感じ、理解することができるということである。共感は、他者の経験や他者の考え方の独自性、個人の行動の準拠枠となるものをできる限り注意深く、敏感に理解しようとすることも意味しているのである。」[5] と述べている。古川が示す「ライフステージごとの生活課題」のなかでは、乳幼児期には、「愛着の形成や、五感を通じての外界との交流をすることによって心身ともに発達することが本人にとっての大きな課題」とし、「言語・運動・感覚機能などの発達状態をよく観察し、心身機能の状態に特別なニーズがあることによって外界との情報交流の手段がどのように遮断され、偏り、強化されているのかを見極め、それを補っていく手立てを講じることが、支援者にとっての課題となる。」[6] と指摘する。乳幼児期の支援者の課題に共感を活かして対応できるよう、大学初年次から幼児期としての他者理解を学ぶための本演習に更なる工夫も必要である。そのためには、大橋があげる以下の指摘が参考になるのではないだろうか。「福祉教育の特色と必要性をあげるとすれば、①一般的、抽象的に共に生きることを教え、学ぶことではなく、具体的に歴史的・社会的存在である社会福祉問題、社会福祉サービス利用者の生活実態を素材として学習することをいう学習素材論と、②現に社会福祉サービスを利用している人々と交流し、その人々の自立に必要な援助活動を行うことを通して、自らの人間関係を図るという実践・体験活動を重視した学習方法論も特色がある」ことである。さらに、福祉教育を進める際の構成要件として8つの留意点を示しているが、そのなかで「②他者および社会への関心と理解を深め、自己の生活・存在を客観化できるようにすること。③お互いの存在と違いを認め合い、一人ひとりの人権を尊重し、かつ相互に協同して活動できる力を身に付けられるようにすること。」[7] に注目した。前述のように、初年次教育に他者理解の演習を取り入れることは、大橋の指摘する福祉教育の留意点に合致しており、相談援助ならびに社会福祉の専門家を目指す学生が取り組む重要な学習である。

おわりに

初年次教育と福祉教育、2つの視点から他者理解の演習を考え取り組んできたが、さらに工夫を加え今後も本演習は続けていきたいと考える。そして、これまでの他者理解や疑似体験の演習で、特に注意を要してきたことが、原田の「社会福祉問題の内容を吟味しないまま、障害疑似体験だけをして『障害者理解』を図ろうとする車椅子体験やアイマスク体験の普及、障害当事者との関係形成を育むことなく技術としてだけの取得を目的にした手話や点字の学習、社会福祉施設や一人暮らし高齢者への『慰問』、素直な気づきは認められずに大人が期待する答えだ

けを評価する事後作文の提出、恵まれないかわいそうな人々への愛の募金…。非日常的な交流活動がかえって偏見を助長することもありうる。」[8] という指摘である。アイマスクをしただけで、視覚障害者になった気にならないこと、耳を覆っただけで聴覚障害が理解できたと勘違いしないこと等、全人的に対象となる人々を捉えることを指導しているが、本演習においては、高齢者や幼児になった自分を想像し、自由な表現で願いごとを作成するよう指導している。人権尊重を念頭に、初年次教育において他者理解をどう学んでいくのか、さらに研究を継続していく所存である。

付記

本稿は、「神戸親和女子大学　2011年度第4種研究費」の助成による研究である。

引用文献

1）濵嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編（1997）「新版社会学小事典」（株）有斐閣　416
2）エブラヒム・アマナット、ジーン・ベック著　伊藤直文、園田雅代他訳者（2001）「十代の心理臨床実践ガイド　揺らぐ十代と向き合うために」（株）ドメス出版　1，22
3）中央法規出版編集部（2007）「四訂社会福祉用語辞典」（株）中央法規出版　182
4）秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主編（2008）「相談援助演習－ソーシャルワーク演習」
（株）弘文堂　21
5）パメラ・トレビシック編著　杉本敏夫監訳（2008）「ソーシャルワークスキル～社会福祉実践の知識と技術～」（株）みらい　214
6）古川孝順編（2007）「生活支援の社会福祉学」（株）有斐閣　49
7）大橋謙策編集代表（2004）「福祉科指導法入門」（株）中央法規　20
8）原田正樹（2001）「地域福祉の主体形成と福祉教育の展開」『別冊発達25　社会福祉の成立と21世紀の社会福祉』ミネルヴァ書房　141